CSUF における FD プログラムに参加して

生命先端工学専攻生命機能化学領域 藤枝伸宇

2011 年 3 月 7 日(月) - 20 日(日)に、米国カリフォルニア州プラセンティアにあるカリフォルニア州立大学フルトン校(CSUF)にて、ファカルティディベロプメント (FD)プログラムに参加した。当専攻からは今回が5回目の派遣であり、時間割やプログラムおよび授業の詳細な内容については既に多くの先生から聞き及んでいたものの、さらなる改善が施されていたように思う。二週間という非常に短い時間ではあったが、英語圏での経験があまりない私にとっては些細なこと一つ一つまで新しく、素晴らしい体験をさせて頂いた。宿泊先のホテルも非常に快適で、治安の悪そうな雰囲気も全くなく、トラブルは一切起こらなかったが、到着早々、東北地方の地震速報が届き、状況がまったくわからないまま、なんの手助けもできない二週間を過ごすことになってしまい、申し訳ない気持ちでいっぱいである。

アメリカでの大学専門講義を体験し、潔癖なまでの合理的かつ直接的な教育システムを目の当たりにした。教授の教育に対する姿勢、講義方法、学生とのコミュニケーション、すべてにおいて日本で受講してきたものとはまったくことなっていた。国民性の違いと言ってしまえばそれまでなのかもしれないが、少なくともこれまで講義に対して深く考えてこなかった自分を恥ずかしいと思った。今回のFD研修で得られたものはこの啓発がもっとも大きなことのような気がする。中学・高校ではなく、塾や通信教育でただ得点を稼ぐためのテクニックを勉学と思い込んでいる日本人（自分を含め）には数分間見学するだけでも大きな衝撃を与えるに違いない。現在の日本の教育スタンダードを変えるためには数多くの人間で挑む必要があるだろう。このため、こういった研修制度が広がり、多くの教育者の意識が変革していくことを望んでいる。

もう一つ特筆すべきことは、アメリカでの先生と呼ばれる人たちの完成度である。多少のレベルの違いはあると感じたもののほぼ全員が熟練されており、プロフェッショナルとしての自負を感じた。現在のスキルではアメリカ式授業を行ったところで、「少し変わった先生だな。」と思われる程度で終わってしまうだろう。このようなことがないよう、これからさらなる訓練を積む必要があると思うばかりである。また、Cindy(English)が初日のWelcome Partyで全員に話しかけ、質問をしていたのも、後から考えればあの場で英語の「Pronunciation・Rhythm・Vocabulary」を確認し、明日からの準備をしていたのかと考えさせられる。Anne（Biology・Scientific Teaching）の「Technology Break」（携帯電話を見るための休憩）やVikkiのGoogleを最大限利用した「Student Engagement」などすべての行動が教育に集約されており、自分とのプロ意識の違いが明白になった。今後はこの経験を生かして、日本での教育システムや大学教育への貢献に尽力するつもりである。

最後に、今回お世話頂いた CSUFの先生方、メンターのMadeline Rasche教授およびChristopher Meyer教授、 並びにプログラム計画から滞在中の様々な世話をして下さったMelem Sharpeさん、Yuki Uedaさんを始めとするCSUFの方々に深く感謝致します。また、ご一緒させて頂いて楽しく過ごせた、岡澤敦司先生、杉山峰崇先生、永富隆清先生、小関泰之先生、およびFDプログラム代表金谷茂則先生、日本側の事務手続でお世話になった松本玲子さんに心よりお礼申し上げます。

全日程を終えて